

# 火を継ぐ者

鳩とカスタードプリン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

長い戦いを終えた後、騎士は火を継ぐことを決めた。

ダークソウルの火継ぎエンドを自分なりに解釈。所々妄想がありますが、あくまで妄想なのであしからず。

キャラは騎士です。

# 目次

火を継ぐ者

---

1



## 火を継ぐ者

手向けのような火の粉が、騎士の周囲を舞い踊る。

小さな焰の先端が銀の籠手に触れる。途端に明るく燃え上がり、瞬く間に肘までを覆った。

騎士は何も言わず、ただ緩やかにその手を空へ掲げる。

すべては終わった。

自分は終わる。

そうして残るものたちのことを、ただ騎士は懐かしむだけだ。

最初の火を失い、急速に冷えていく世界。

その昔、いにしえの竜は不死として恐れられていたと言う。

だが古竜は打ち倒され、火の時代が訪れた。

だから、このリングは呪いなのだろう。再び古竜の時代がやってくることの証。

不死たちが世界に溢れ、火は完全に消え、寄る辺のない闇の世界が顔を出す。

故郷を失った不死は小さな篝火を宿とし、その運命に立ち向かうことになったのだ。

だが——騎士にとつては、世界の命運などどうでも良かった。蛇の計略も、世界の存続も心に響かない。元より故郷を追い出され、幾年経ったかも忘れるほど生きながらえた身。偶然か幸運か、奇妙な縁が重なって得られた機会により不死院を抜け出したが、救世の使命に燃えたことはなかった。

どれほど傷付こうと死ぬことはない。汝立ち止まるべからず。歩みを止めれば、待っているのは精神の終焉だ。狂気への一線を越えるにはまだ早かった騎士は、死への恐怖から剣をふるった。その内に、同じ運命の渦中にある者と出会い、騎士は再び活力を得た。

はじめは、名も知らぬ白教の騎士との約束に。

次に、太陽印の奇矯な戦士の豪快な笑いに。

そして、声の出せぬ年若い娘の哀れな姿に。

騎士は声を思い出し、笑顔を思い出し、憐憫を思い出し、闘志を思い出す。

王国の朽ち果てた、だが壮麗さの名残を感じる姿に感嘆し。

支え合う美貌の姉妹に罪悪に打ちのめされ。

古城の罠に力を試され。

栄華を誇った都に寂寥を感じ。

幻影の王女と守り続ける王子に哀しみを抱き。

遺跡にてかつての王の零落にままならない生を思い。

大樹が根をはる虚ろにて、己の矮小さを嘯み締め。

混沌の廃都で、火への畏れを覚え。

そして、幾多の出会いに心を震わす。

世界は拡散する。

最初の火を失って。

その拡散を止めるため、火にソウルを灯さねばならない。

不安定な世界を渡れ。先を知るが良い。そうして自らの旅に生かせ。蛇はそう言うて笑うのみ。

「お互い、己の使命を果たしましょう……」

人見知りな聖女は真摯に祈りを捧げる。世間知らずの清らかな顔は、後に己の無力さを知り絶望に彩られることになる。騎士はその真摯さが好ましいと思ったが、祈りの声が止むことはなかった。

「無事でいろよ、あんた。亡者になんてなるんじゃないぜ」

騎士に初めて呪術を教えてくれた男。その親しみと気遣いは騎士につかの間の安寧をもたらしした。

「あんたまだ生きてるし、俺だって謝ってるじゃないか……」

ずる賢く、調子の軽い男だった。本当はだいたいぶ殺したかったのだが、久しぶりに人の短所の最たるものを見て、なんとなく新鮮な気持ちになったものだ。

「死ぬんじゃないぞ……」

随分世話になった鍛冶屋。死ぬ時もきつと金槌を持ったままだろう、鍛冶に身命を捧げた男であつた。あの男は元氣だろうか。

「哀れだよ、炎に向かう蛾のようだ」

寵愛の女神に祝福されし騎士。彼が追い求めたものは果たしてなんだつたのか？

「馬鹿弟子が、亡者になんかなるんじゃないぞ」

呪術師は皆暖かな心を持つのだろうか。そう思うくらいには彼らは優しかった。つつけんどんな口調の中にも、フードから垣間見える口元にも気遣いが感じられた。炎を畏れよ、さもなくば。彼女の言葉を胸に、騎士は力に吞まれぬよう心がけた。

「ウーラシールの宵闇、参りました……」

美しく上品な物腰、穏やかな笑顔。過去から来たという女性は、騎士に無条件の好意のむず痒さを思い出させた。あのひと時は、静謐で得難いものだっただろう。

「……すいません」

声を出すのを嫌つた灰色の聖女。彼女のためにソウルを取り戻した騎士は、聖女の悲惨な運命を思う。自分が火を継げば、彼女は人として死ぬのだろうか。



そして。

先程も共に戦った友を思い起こし、騎士は苦笑にも似た笑みを溢す。

「太陽は偉大だ。すばらしい父のようだ……」

とんでもない変人だと思った。大概な奴だと思った。しかし自覚はあるようで、それが騎士に夢を追うことの熱さを思い出させた。

旅の中で幾度も協力することになった彼と、雄大な太陽を目を細めて眺めれば、何か心が洗われるような気持ちになるものだった。

俺も感化されたかな、と騎士はやぶさかでなさそうに微笑む。

戦いの後、彼はどうなっただろう。

見えない太陽を探し続け、目を曇らせているのだろうか。

だが最後に共闘した時。言葉はかわしていないが、ある種の開き直りのようなものを彼から感じた。

彼の歩みは止まらないだろう。直接言葉にすることはなかったが、彼はその心に既に太陽を灯していると、騎士はそう思うのだ。

世界を照らす炎が小さな身を包む。体から、致命的な何かが燃やされていくように感

じられた。

これで世界は元通り。完全な王のソウルを捧げ、強大な力を持つ身を燃料に捧げ、騎士は薪の王グウインの後を継ぐ。

これ以上ない程悲惨な運命に、だが騎士は心安らかそうに笑った。それでも残るものはあると。

自らが助けてきた者たち、それが作りだすこれからの世界。それがあつる限り、騎士は幾らでも笑えた。

美しい焔が地を舐めるように広がる。最初の火の焔を炎で満たしていく。